4. どうやってサケを増やすの？ ③ ― 放流する

市民による、サケ稚魚の放流。
（「帯広さけの会」による市民放流祭。売買川さけのふるさと公園）

（1）春が近づき放流が始まる

十勝では４月から５月ごろ、海の水温が上がって５℃くらいになったら、稚魚が川に放流されます。

放流された稚魚は数日から１ヶ月ほどで海へ下り、沿岸帯でエサをとって成長します。

水温が13℃になるころオホーツク海へ移動し、ここで夏から秋まで育ったあと、冬に北太平洋へ向かいます。

平成16年には、北海道全体で約10億尾の稚魚が放流されました。

（2）はるかアラスカ湾まで

オホーツク海から東へ向かったサケは、ベーリング海やアラスカ湾まで行くようです。季節ごとに移動しながら３年から５年ほど、海で育ちます。

海で大きく育ったサケは、卵を産むために生まれた川をめざします。どうやって広い海の中を迷わず帰ってくるのかは、はっきりしていません。近づいてからは、生まれた川のにおいをたよりにするともいわれています。

日本産のサケの回遊ルート（イメージ図であって、正確な道すじではありません）。

産卵場所でのオスとメスのサケ。

（3）自然産卵も

十勝に帰ってきたサケのうち、多くは海でとられてわたしたちの食たくに並びます。また、川へ上ったサケも、多くは捕獲場でとらえられます。

しかし、そうしたところをすりぬけるようにして川を上り、自然産卵するサケもいます。

川底が砂利で、わき水が出ているところが、サケの産卵場所となります。

産卵後７～10日ほどで、サケはすべて死に一生を終えます。

参考：「漁業生物図鑑 北のさかなたち」 長澤和也・鳥澤雅 編 ㈱北日本海洋センター 1991
「サケ・HTBまめ本60」木村義一 著、北海道テレビ放送、1998
「北海道さけ・ます増殖事業協会のホームページ」 http://www.sake-masu.or.jp/
「水産総合研究センター さけますセンターのホームページ」 http://salmon.fra.affrc.go.jp/

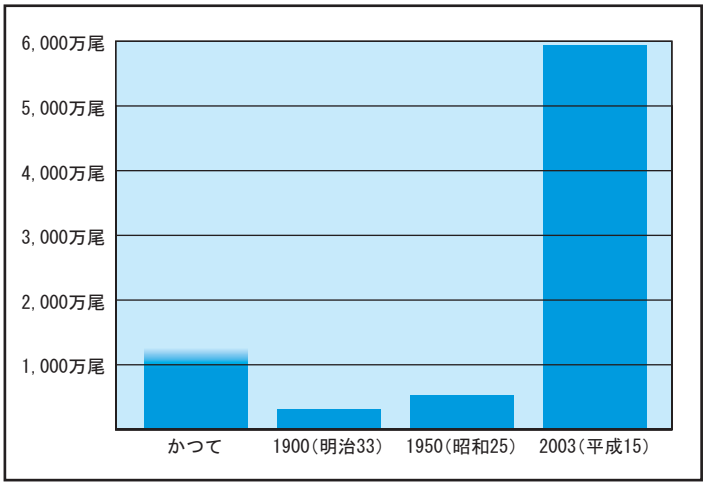
浦和茂彦（2000）日本系サケの回遊経路と今後の研究課題、さけ・ます資源管理センターニュースNo.5、p3-151
米盛保（1975）北海道起源シロザケに対する標識放流から得られた結果の分析についての試み. 北太平洋漁業国際委員会研究報告、第32号、p123-151

（4）増えたサケ

サケを人間の手でふ化させることは、かなり前から行われています。十勝でも、明治時代末の1900年ころから始まっています。けれども、なかなかサケは増えませんでした。

しかし、昭和45年(1970)ころから、稚魚（ちぎょ）の飼育などのふ化技術が向上し、サケの数が増え始めました。

今では、北海道全体で4,000万～6,000万尾（び）くらいのサケが帰ってくるようになりました（年によって変わります）。



北海道にもどってきたサケの数。

参考:「サケ・HTBまめ本60」 木村義一 著、北海道テレビ放送、1998
「北海道さけ・ます増殖事業協会のホームページ」 http://www.sake-masu.or.jp/

川で生まれ、海で育ったサケを食べる

サケは川で生まれ、海へ下り、ベーリング海まで行って大きくなり、再び生まれた川に帰ってきます。

その多くは、北太平洋で育った後、帰ってくるところでとらえられ、私たちの食たくに上ります。※1

また、川に上ったサケも、とらえられたり自然に産卵（さんらん）したりした後、冬をこさずに死んでしまいます。

しかしこうしたサケの命は、ある時は新しいサケの子どもとして、またある時は私たちの体となって生き続けます。

サケを通じて、私たちも川や広大な北太平洋と、つながっているのです。

※1　食たくに上るサケ(しょくたくにのぼるサケ・食卓に…)：食料品店で売られている「サケの仲間」には、サケ（シロザケ）ではないものもある。例えば「トラウト・サーモン」などは、主に海外で養殖(ようしょく)されたニジマスである。

参考：「サケ・ＨＴＢまめ本60」 木村義一 著、北海道テレビ放送、1998
「ザ・築地市場－ザ・さかな－さかなの知識あれこれのページ」
((社)築地市場協会) http://www.touoroshi.or.jp/fish2/fish2-12/fish2-12.html